台大日本語文研究第 40 期
2020 年 12 月，頁 51-75
2020-09-29 收稿，2020-11-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202012_(40).0003

麥生本系統《源氏物語》須磨巻之文本
—由異文所依據之資料來源見其生成背景—

林欣慧*

摘要

《源氏物語大成》於選採具別本類特色之校異用文本時，並未採用麥生本系統的須磨巻。本論文為檢證《大成》選採方式之妥切性而對該巻內的異文性質進行考察，並期待透過這些考察，對解明麥生本系統之生成背景有所助益。

本系統被《大成》採用的其他巻中可看見幾項特色。本論文首先便檢查須磨巻中是否也有這些特色。具體方式為，先確認本巻中「おもほす」「おもほゆ」此一特殊語形之使用狀況。結果可知，比起一些被《大成》採用的巻，須磨巻中此一語形的使用量反而更多。接著，確認本巻中是否可看到以文意明瞭化為目的之異同。結果可知，須磨巻中確實也有此類異同。

以上述考察為基底，筆者進一步論及以下兩點。其一，麥生本系統的須磨巻中確實可見不少堪為別本之處，然於在中盤卻似乎略顯疲態，有依場面調整投入程度的情形，直至尾盤異文出現頻率才又提高。其二，調查異文出處後，發現其有參考河內本系的表現，並講究與和歌相關語彙之傾向。

關鍵詞：須磨巻、大島本、尾州家本、麥生本、阿里莫本

* 國立台灣大學日本語文學系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

The Text of Suma Volume of *The Tale of Genji* in The Case of The Version Represented by Munyuubon: Analyze The Way it Formatted by Researching The Sourse of The Differences

Lin Hsin Hui*

Abstract

When choosing the text with the features of Beppon, *Genjimonogataritaisei* excluded the Suma volume of the version represented by Munyuubon. To examine the result, this paper researched the differences and elucidate the way it formatted.

Therefore, the existence of the features discovered in other volumes should be inspected. After checking the using situation, the amount of 'Omohosu' and 'Omohoyu' is more than some volumes committed as Beppon. Even more, the differences for making the article easier can also be found .

On the basis above, there are two things can be confirmed. First, it seems the writer get tired halfway through and therefore influence the amount of the differences in some part. Furthermore, by checking the origin of the differences, it can be found that the reviser seems bent on considering the vocabulary of Kawatibonkei and the words related to Uta important.

Key words: Suma Volume, Ooshimabon, Bisyuukebon, Munyuubon, Arimakabon

* Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

麦生本系統『源氏物語』須磨巻の本文
—異文の依拠する資料からその生成背景を見る—

林欣慧*

要旨

本稿は、『源氏物語大成』において別本的特徴を有する校異用の本文を採択する際に使用されなかった麦生本系統の須磨巻を考察対象とする。『大成』の採択方式の妥当性を検証すると共に、当該巻における異文の実態をも考察することによって、麦生本系統の生成背景を明らかにする一助となりたい。

そのため、『大成』に採用された麦生本系統の他巻に見られる特徴が須磨巻にも見られるかを検証した。まず、「おもほす」「おもほゆ」という特殊語形の使用状況を確認したところ、須磨巻において、当該語形は寧ろ『大成』に採用された一部の巻より多用されていることが分かった。次に、文意の明瞭化を図った異同が見られるかを検証した。その結果、須磨巻にも同じ傾向の異同が少なからず確認できることが分かった。

以上の考察を踏まえ、更に以下の二点を指摘した。まず、麦生本系統の当該巻において、別本たりうる箇所は確かに少なからずあるが、中盤あたりでいささか倦怠の様相を呈し、場面によって力加減を変える傾向がある。また、異文の出所を確認した結果、河内本系の表現を参照する可能性があり、和歌に関わる語彙に拘る姿勢が窺えると論じた。

キーワード：須磨巻・大島本・尾州家本・麦生本・阿里莫本

* 国立台湾大学日本語文学科助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

麦生本系統『源氏物語』須磨巻の本文
—異文の依拠する資料からその生成背景を見る—

林欣慧

一、はじめに

『源氏物語』の別本はそれぞれ独自の本文を有しており、その再検討を試みる論著も少なからずある。しかし、別本と一括りにされる数多くの写本の中でも、特に麦生本、阿里莫本、および中京大本という三つの写本に見られるある系統の本文が独自の表現を多く使っている。また、同じ特徴の本文が三つの写本に現存していることから、この麦生本を代表とする本文系統はある程度利用者がいたと考えられる。

『源氏物語大成』[1]（以下『大成』）は校異用本文として採用した写本を青表紙本、河内本および別本の三種に分け、校異篇の各巻の冒頭に、それぞれに属する写本の名前を示している。一部の巻において、麦生本と阿里莫本は別本のところでその名を挙げられているが、一部の巻において、この二本の名前が見当たらない[2]。この本文系統を研究する一環として、筆者は『大成』において校異用の本文として採用された巻を対象とし、その特徴をできるかぎり調査してきた。

しかし、『大成』の採択は必ずしも適切とは言えない。特に豊富な異文を持つ夕顔巻が採用されなかったという結果に疑義を呈した先行研究[3]もある。この問題を踏まえ、本稿では、麦生本系統所属の二本が校異用の別本として名前を挙げられなかった須磨巻を取り上げる。同巻における別本的特徴の有無を確認することによって、『大成』

1 池田亀鑑（1979）『源氏物語大成　巻一　校異篇』七版、東京都、中央公論社
2 『大成』が出版された際、麦生本と同じ特色を持つ中京大本はまだ池田氏に発見されていないためか、同書において紹介されていない。
3 岡嶌偉久子（2010）『源氏物語の書誌学的研究』初版、東京都、おうふう。「独自の異文を比較的多く持つ巻である」としている。p.231

臺灣大學圖書館典藏

の採択の適切性を再検証する。更に、須磨巻における異文の性質を把握し、麦生本系統の生成背景を探る一助となることを願う。

二、「おもほす」「おもほゆ」の使用状況

『大成』が別本として採用した巻を対象に考察した際、把握した麦生本系統の特徴的表現の一つとして、他本には「おぼす」とある箇所が「おもほす」に、「おぼゆ」とある箇所が「おもほゆ」になっている現象がある[4]ことが確認されている。以下まず須磨巻の当該語形の使用を確認する。

（一）「おもほす」「おもほゆ」の使用率

はじめに、『源氏物語別本集成』[5]で麦生本系統須磨巻の本文における当該語形の使用率を把握した。但し、中京大本は当巻が散逸したため、確認できたのは麦生本と阿里莫本の二本のみである。肉眼による調査に不備があることを恐れ、『源氏物語』の CD-ROM[6]を利用し、大島本と尾州家本における当該語彙をも検索した。その結果は以下の通りである。

「も」なしと「も」ありの語形を合計した結果、大島本、尾州家本および麦生本系統はいずれも 110 例前後あるが、「も」ありの用例数に関しては、大島本は僅か 2 例で、尾州家河内本の 39 例に及ばない。しかし、麦生本と阿里莫本に至っては、合計 111 例[7]中 104 例、即ち約 93％で、圧倒的である。この数字から、麦生本系統の須磨巻にもこの特徴があると言える。但し、他巻において、当該語形の分布にはばらつきが認められる[8]が、須磨巻の場合はどうだろう。

---

4 林欣慧（2018）「『源氏物語』の異文―麦生本、中京大本および阿里莫本系統を中心に―」『台大日本語文研究』第 35 期、pp57-85、国立台湾大学出版委員会

5 源氏物語別本集成刊行会（1990）『源氏物語別本集成　第三巻』初版、おうふう

6 伊井春樹（1999）『CD-ROM 版　角川古典大観「源氏物語」』角川書店

7 第 64 例の「おぼえ」は阿里莫本に見られないが、御物本・三条西家本・大島本には見られる。そのため、阿里莫本が書写段階に欠脱したと考えられ、表に入れることにした。

8 林欣慧（2019）「『源氏物語』玉鬘巻の本文様態―麦生本系統を中心に―」『台湾日本語文学報』第 46 期、pp82-85、台湾日本語文学会

臺灣大學學術期刊資料庫

（二）各場面における当該語形の分布状況

『新編日本古典文学全集』[9]によれば、須磨巻はおよそ 21 場面に分けられる。

順	場面の概要
1	源氏の須磨退去を受け、女君たちが悲しむ
2	源氏が左大臣邸の人々に別れを告げる
3	源氏が二条院で紫の上と別れを惜しむ
4	源氏が麗景殿女御と花散里の住処を訪れる
5	実生活に関わる雑事や所領の処置をする
6	源氏が忍んで朧月夜と歌を読み交わす
7	藤壺に別れの挨拶をし、桐壺院の墓参りをする
8	東宮の人々、一部の官吏が源氏の退去を悲しむ
9	出発当日源氏が紫の上と最後の時を共に過ごす
10	須磨の住居の様子の描写と都の人々への到着報告
11	源氏の手紙を見た紫の上が悲嘆に暮れる
12	藤壺、朧月夜および紫の上が源氏に返信する
13	六条御息所と消息を交わし、花散里を慮る
14	朧月夜は帝の寵愛を受けるも、源氏のことが忘れられず
15	源氏は須磨で苦悶な秋を過ごす
16	上京途中に須磨を通った太宰大弐が源氏を見舞う
17	人々が弘徽殿を憚る。紫の上が二条院の人々に愛される
18	源氏が家臣たちと管弦の遊びに興じ、辛さを紛らわす
19	明石入道が娘に源氏と結ばせることを考える
20	宰相中将が罪を問われることを恐れず、源氏を見舞う
21	源氏が祓いの途中に暴風雨に襲われ、異形の夢を見る

以下、場面ごとの分布状況を確かめる。まず場面 1 から場面 5 までの結果を下の表に示す。

[9] 阿部秋夫他（1995）『新編日本古典文学全集 21 源氏物語 2』東京都、小学館

臺灣大學學術期刊資料庫

表 1（場面 1～場面 5）

場面	計	文節番号	も	場面	計	文節番号	も
1	1	120014	●	2	16	120793	●
	2	120043	●	3	17	120876	●
	3	120061	●		18	120889	●
	4	120084	●		19	120929	●
	5	120092	●		20	120964	●
	6	120113	●		21	120968	●
	7	120116	●		22	120973	●
	8	120140	●		23	121161	●
	9	120148		4	24	121178	●
	10	120164	●		25	121190	●
	11	120196	●		26	121224	●
2	12	120465	●		27	121242	●
	13	120490	●		28	121249	●
	14	120598	●		29	121334	●
	15	120605	●	5	30	121517	

「も」の有無に関わらず、麦生本系統における当該用語に全て通し番号を付し、「も」ありの場合は黒丸をつけ、表に示した。

表 1 から分かるように、「も」なしの語形のままの箇所は第 9 例と第 30 例の二つのみである。前者は、須磨へ赴くのに、自分を一緒に連れて行かない源氏のことを恨めしげに思う紫の上の心情を描く「うらめしげにおぼしうむじたり」に、後者は須磨出立の前に、風情ある品物は勿論のこと、実生活に関わる面においても思い至らぬことのない源氏の用意周到さを描く「まめまめしきすぢにもおぼしよらぬ事なし」に使われている。使用されない箇所には共通点があるのだろうか。結論を出すには、当該系統の須磨巻におけるこのよ

臺灣大學學術期刊資料庫

うな箇所を全て確認する必要がある。

表 2（場面 6～場面 12）

場面	計	文節番号	も	場面	計	文節番号	も
6	31	121565	●	10	50	122468	●
	32	121591	●		51	122478	●
	33	121594	●		52	122483	●
	34	121596	●	11	53	122577	●
7	35	121698	●		54	122600	●
	36	121707	●		55	122616	●
	37	121740	●		56	122706	●
	38	121830	●	12	57	122711	●
	39	121867	●		58	122717	●
	40	121887	●		59	122720	●
8	41	122021	●		60	122737	●
	42	122028	●		61	122781	●
	43	122037	●		62	122816	●
	44	122068	●		63	122866	●
	45	122175	●		64	122872	
9	46	122202	●		65	122881	●
	47	122247	●		66	122890	
	48	122270	●		67	122914	●
10	49	122411	●				

「も」なしの語形は二箇所ある。第 64 例は紫の上のことが恋しく、夜も昼もその面影が目に浮かぶように感じる源氏の心情を描く「夜ひるおもかげにおぼえて」の一節に、第 66 例は紫の上のことが恋しいあまり、内密に須磨に迎えようとするも、やはりせめて我が身の罪を滅ぼそうと思い返す源氏の考えを説明する「つみをだにう

臺灣大學學術期刊資料庫

しなはばやとおぼせば」の一節に使用されている。

表 3（場面 13～場面 17）

場面	計	文節番号	も	場面	計	文節番号	も
13	68	122996		15	80	123423	
	69	123023	●		81	123450	●
	70	123114	●		82	123458	●
	71	123150	●		83	123493	●
14	72	123171	●		84	123625	●
	73	123192	●		85	123674	●
	74	123212	●		86	123759	●
	75	123267	●	16	87	123951	●
	76	123295	●	17	88	123966	●
	77	123313	●		89	123983	●
	78	123349	●		90	123989	●
15	79	123395	●		91	1234072	●

「も」なしの語形は場面 13 にある第 68 例と場面 15 にある第 80 例に見られる。前者は六条御息所が「物を哀とおぼしけるまゝ」に手紙を認めた状況を説明する場面に、後者は詠歌する源氏の美しい姿に、「人々おどろきてめでたくおぼゆる」という心情を描写するのに使用されている。

次に場面 18 から場面 21 にある最後の二十例における「も」なし語形の分布状況を確かめる。

臺灣大學學術期刊資料庫

表 4（場面 18～場面 21）

場面	計	文節番号	も	場面	計	文節番号	も
18	92	124123	●	20	102	124672	●
	93	124129	●		103	124681	●
	94	124156	●		104	124821	●
	95	124165	●		105	124828	●
	96	124217	●		106	124833	●
	97	124306	●		107	124917	●
19	98	124378		21	108	125031	●
	99	124533	●		109	125095	●
	100	124559	●		110	125249	●
20	101	124603	●		111	125255	●

表 4 の通り、「も」なしの語形が見られるのは第 98 例の一箇所のみで、明石入道が明石の君を源氏に奉ろうという計画を妻に説明する時に言った「あこの御宿世にておぼえぬ事のあるなれ」の一言に使用されている。他の箇所とは異なり、物事を考え、もしくは感じるという意味としてではなく、思いがけぬという意味で使用されている。

以上のように、「も」ありの語形はほぼ満遍なく使用されていることが分かる。また、「も」なしの語形が使用される理由として、第 98 例の場合は語義が他のそれと異にすることが考えられるが、他の六箇所に関してはいずれも他の諸例同様、物事を考える、もしくは感じるという意味で使用されており、使用対象にも特に共通点が見当たらないため、あらゆる「おぼす」・「おぼゆ」を「おもほす」・「おもほゆ」という語形に置き換えることを原則とした機械的な作業を行う過程中の不注意による産物である可能性がある。「も」ありの語形が他の写本より多いことは、当該系統の一貫した特色であるが、須磨巻は使用率が高いのみならず、さほどばらつきが認められない

臺灣大學學術期刊資料庫

点から、校訂者がこの巻に力を入れていることが窺える。

ただ、場面 12 に 2 例もあり、やや多い点と、「も」なしの語形が場面 12 以降に比較的多くある点が気になる。何故このような傾向が見られるのか。当該語形のみならず、やはり他の性質の異文とも照らし合わせるべきである。

三、異文の性質

「おもほす」・「おもほゆ」の語形が他本より圧倒的に多く使用されている現象の他に、麦生本系統のもう一つの特徴として、文意の明瞭化を目的とした語彙・文の増補、削減、もしくは置き換えが見られる[10]。以下、須磨巻における当該現象の有無を把握していきたい。その上で、文意に関わるこれらの異文がどのような分布状況を呈しているかを確認する。最後に、文意の明瞭化では解釈しきれない箇所の意図をも分析する。

（一）増補、削減および置き換え

先に増補にあたる例文を二つ見る。源氏の須磨下向に悲嘆を禁じえない左大臣は以下のように発言する。

◆資料①

【大島本】・【尾州家河内本】

「…よくぞみじかくてかゝるゆめを・(も)みずなりにけると思給・(へ)なぐさめ侍(はべるを)・・。おさなくものし給うが、かくよはひすぎぬる中にと・(ぞ)まり給て…」

（三九八 14-三九九 2）・（二三九 07-08）

【麦生本】・【阿里莫本】

「…よくぞみじかくてかゝる夢を見(みあ)ずなりてけると思給なぐさめは

臺灣大學學術期刊資料庫

[10] 注 4 論文 pp67-74

べるを、をさなき御ゆくゑ物し給が、かくよはひすぎぬる中にとまり給て…」

（120512-0532）

早世した愛娘葵の上を未だに忘れられないが、亡くなったことにより、寧ろこの夢のように思える源氏の悲しい境遇を見なくてすむのは、せめての救いである。とはいえ、まだ幼子である夕霧が母葵の上と死別し、父源氏にも置き去りにされ、自分たちのような年老いた人の中に留まる状況はやはり嘆かわしいのだという。

大島本と河内本と比べると、麦生本系統の二本には「御ゆくゑ」という言葉が追加されていることが分かる。『日本国語大辞典』によれば、ある人の忘れ形見に言及した文脈を受けて、「子孫」の意味で使用される例が『太平記』に見られる[11]。「幼く」という表現だけでも、夕霧のことを指していることが推定できるが、主語のない文章に当該語彙を付け加えることによって、取り残された幼い人というのは夕霧のことであることが一層明白になった。

次に、源氏が須磨へ下向する前には、まず亡き桐壷院の墓参りに行くという状況を説明する一節である。

◆資料②

【大島本】・【尾州家河内本】

あすとて・くれには院の御はかおがみたてまつり給とて…

（四〇七 09-10）・（二四四 11-12）

【麦生本】・【阿里莫本】

あす出給はんとてのくれに故院の御はかをがみ奉らんとて北山へ

[11] 『太平記』「北山殿謀叛事」における「故大納言殿の忘形見の出来させ給て候しが、…生れ落ち給ひし後、幾程無くはかなく成給候、是も咎有し人の行ゑなれば、如何なる御沙汰にか逢候はんずらん」の一節を例文として挙げている。

臺灣大學學術期刊資料庫

まう(ふ)で給。

（121607-1616）

大島本と尾州家本のように、「明日」のみの場合でも、文脈から、読者はそれが須磨へ行く日を指していると理解できるだろうが、麦生本系統の場合は、「明日」の後に更に「出給はん」を付け加えることによって、当該箇所が上述の通りに解釈されることを確保しようとしたと考えられる。

また、増補の他には、置き換えによって同じ目的を果たそうとする箇所もある。同じく二例挙げる。

◆資料③

【大島本】・【尾州家河内本】

なゝつになり給しこのかみ(た)、みかどのおまへによるひるさぶらひ給て、そうし給事(こと)・のならぬはなかりしかば…

（四一一 10-11）・（二四七 02-03）

【麦生本】・【阿里莫本】

ななゝ(ゝ)つに成給しこなた御門のおまへによるひるさぶらひ給て、そうし申給事のかなはぬはなかりしかば…

（122109-2122）

七歳から亡き桐壺院のそばにお仕えし、その上奏したことであれば、実現しないことはないという源氏に対する故院の寵愛ぶりを説明する一節である。

大島本と尾州家本にはともに「ならぬ」とある。実現する意の「成る」の否定に、更に「なかりしかば」を付け加えた二重否定の言い回しである。ただし、「ならぬ」が「いけない」という意味として使

臺灣大學學術期刊資料庫

用される場合[12]もある。そのため、「叶わぬ」に置き換えることによって、誤解が生じる可能性が低くなったとも言える。

他に、自身の将来に思案を巡らす明石の君の心中を描く一節にも、似た校訂の仕方が見られる。

◆資料④

【大島本】・【尾州家河内本】

たかき人は我(われ)・をなにのかずにもおぼさじ。ほどにつけたる世(よ)をばさらに見(み)じ。

（四三一 04-05）・（二五八 14）

【麦生本】・【阿里莫本】

たかき人はわれを何の数にもおもほさじ。ほどにつけたり(る)、よすがをばさらに見じ。

（124555-4565）

都の尊い身分の方にも劣らぬ気品と教養を誇るものの、所詮受領階層の娘にすぎない。このような自分を、身分の高い人が相手にするわけがない。とはいえ、気位が高いため、受領なりの縁談に甘んじるつもりもない。

青表紙本系統の大島本と河内本系統の尾州家本には「よ」とある。平安文学において、このような文脈で使用される「よ」は即ち男女の間柄を指していると理解できるが、一文字のみで、人によっては、解釈する上で、曖昧に感じる場合もある。

これに対し、麦生本系統には「よすが」とあり、ここでは「夫」のことを指していることがより明確になる。

また、上述四例のように、文意の明瞭化を目的とした改変のみな

[12] 例えば、『日本国語大辞典』は当該語義の用例として、室町末から近世初にかけて成立した虎明本狂言・八尾における「去ながら、いまほどは地蔵の文をもちいてはならぬ」の一節を挙げている。

臺灣大學圖書館典藏資料庫

らず、他の意図により行われた増補と置き換えも挙げられる。例えば、源氏が左大臣邸へ別れを告げに訪れた際の夕霧の天真爛漫な姿を描く一節がある。

◆資料⑤

【大島本】・【尾州家河内本】

わか君（ぎみ）・はいとうつくしうてされ（く・て）・はしりおはしたり。

（三九七 07）・（二三八 09）

【麦生本】・【阿里莫本】

わか君はいとうつくしうてされありき給てはしりおはしたり。

（120303-06）

主流として位置づけられる二本と比較すれば、麦生本系統において、夕霧のはしゃぎぶりを描く「され」の後に、「ありき」という言葉が付け加えられていることが分かる。

実は、他本にない「ありき」が付け加えられた箇所は上述の例のみならず、須磨に到着した源氏が都の人々を気にかける場面においても、「わか君の何（なに）・心なくまぎれありき給しなどをはじめ、こゝかしこ思やり聞え給…」（122487-2496）のような増補が見られる。

何故このような異文が生じたのか。同じく夕霧に関する描写を確認したところ、資料⑤で挙げた箇所の少し後に、夕霧の無邪気な姿を描く文言がもう一箇所ある。麦生本系統の二本に「わか君のなに（何・）心もなくまぎれありきて…」（120479-0482）とあるのみならず、大島本と尾州家本にもそれぞれ「わかぎみのなに心なくまぎれありきて…」（三九八 12）と「わかぎみなに心もなくまぎれありき…」（二三九 05）とある。このことから、当該箇所においては諸本共通して「ありき」が使用されていることが分かる。

実は、麦生本系統のもう一つの特徴として、前後の関連箇所と同

臺灣大學學術期刊資料庫

じ表現を使用しようとする箇所が見られる[13]ことが挙げられる。この夕霧の描写における「ありき」の追加は、正にこのような特徴の一例と言えよう。

更に、このように表現の一致を図るために、関連表現を親本から援用するに留まらず、次のような状況も見られる。

須磨出立の前に、源氏は人々を訪れ、別れを告げる。格別に愛情深いというわけではないが、その心細い姿を思いやり、花散里をも訪ねることにした。

◆資料⑥

【大島本】・【尾州家河内本】

にしおもて(を)・はかうしもわたり給はずやに(に)とうちくしてお(も)・ぼし(つゞ)・・

け(ゝ)・るに…

（四〇四 12-13）・（二四二 16-17）

【麦生本】・【阿里莫本】

にし(××)おもてはかうしもまださながらにて、わたり給はずもやとう

ちくん(つし)じておもほしけるに…

（121243-1249）

花散里が源氏の来訪に驚く反応を効果的に表現するために、大島本と尾州家本は、その下敷きとして、先に源氏がこうまでして訪れることはないだろうと、西面に住まう花散里がふさぎ込んでいた様子から描き始めた。

それに比べ、麦生本系統は「かうしも」の後に、「まださながらにて」の一節を付けている。この異文はどのように解釈すべきか。何故このような文言が存在するのか。前後の文章と照らし合わせたと

[13] 注 4 論文 pp67-70

臺灣大學學術期刊資料庫

ころ、この花散里訪問の場面の前に、源氏が紫の上を訪れる場面があり、その場面において、類似表現があることが判明した。

この紫の上を訪れる場面において、大島本には「にしのたいにわたり給へれば、御かうしもまいらでながめあかしたまひければ…」（四〇一 13-14）とあり、麦生本系統の二本にも「にしのたいにわたり給へれば、みかうしもまいらでながめ明し給ければ…」（120890-0897）とある。

この大島本と麦生本系統における前後の文章から、資料⑥の成因が凡そ把握できた。即ち、麦生本系統の校訂者が花散里訪問の場面を読解する際に、恐らく訪れる女君の住まいが同じく「西」にあり、「かうし」という文字のある、この前の紫の上訪問の場面の状況に引かれ、花散里訪問の場面における「かうし」を「格子」と解釈した上で、まだ格子を下ろしていないという意味を表すために「まださながら」をつけたという経緯が考えられる。

しかし、それだけでは「まださながら」という紫の上訪問の場面にはない表現がどこから来たのかという問題が残る。『大成』と『別本集成』の校異で挙げられた諸本[14]を確認したところ、当該表現は河内本系諸本に確認できることが分かった。「にしのたいにわたり給へれは、みかうしもまいらでさながらながめあかし給けり。」（二四一 03-04）である。

確かに、他巻において、麦生本系統は河内本系統との親近性を示しているが、須磨巻においては、寧ろ大島本と相通じる箇所が多い[15]。そもそも、麦生本系統の紫の上訪問の場面に「さながら」という文言がないことから、その親本は純粋な河内本ではないと分かる。

14 『別本集成』は陽明文庫本、大島本、御物本、麦生本、阿里莫本、三条西家本、尾州家河内本を、『大成』は大島本、横山本、池田本、飯島本、肖柏本、三条西家本、七毫源氏、高松宮家本、尾州家本、平瀬本、河内本系統の大島本、御物本と陽明文庫本を挙げる。

15 例えば、今まで源氏が胸に秘められた情熱を隠すことに努めてきたことを感じ取った藤壺の心中を描く一節として、尾州家本には「めやすくもてかくしつるぞかしとあはれにもおもほしゝられ」とあるが、麦生本系統は三条西家本と大島本と同じく、「あはれに」の後、しばらく対応する本文がない。

にもかかわらず、花散里訪問という別場面の注記とも位置づけられるような異文を増補する際に、現在確認できる諸本の中で河内本系諸本に見られる文言が使用されているということは実に興味深い。このことから、麦生本系統の校訂者が当該系統の親本を書写した際に、たとえ河内本系そのものとは言わないまでも、河内本系と近しい箇所を持っている諸本を座右に置き、参考対象とした可能性があると考えられる。

このことから、麦生本系統の今まで見せた河内本との類似性は、偶然取り合わせた親本がそうであったからではなく、寧ろ河内本、たとえば成立が古く、河内本系統の代表的な写本・尾州家本の存在を意識し、近づこうとした可能性もある。

ところで、『源氏大鏡』における紫の上訪問の場面にも、「西のたいには、かうしもさながら、とはあかしたあまへり」[16]とある。『源氏大鏡』前後の表現を確認したところ、麦生本系統とは特に類似性が認められず、当該表現が『源氏大鏡』から取り入れられたとは思えないが、同じく「さながら」という表現を使用していることから、梗概書『源氏大鏡』が踏まえた本文を調査する際に、河内本系諸本との関係性が課題の一つとして挙げられる。

このように、増補と置き換えの例は少なからず見られるが、麦生本系統に属する他巻に見られる特色を、須磨巻が確かに有することを確認するために、もう一つの特色にあたる削減の有無を調査したところ、須磨巻にはあまり見当たらず、次の一例が挙げられるのみである。

◆資料⑦

【大島本】・【尾州家河内本】

大将かくておはすときけば、あいなう(く)すいたるわかきむすめたち(ども)

×××

[16] 石田穣二・茅場康雄（1989）『古典文庫第五〇八冊　源氏物語〔訂正版〕』古典文庫。p.123

臺灣大學學術期刊資料庫

は、舟（ふね）・のうちさへはづかしう心（く）げさうせらる。

（四二五 07-08）・（二五五 03-04）

【麦生本】・【阿里莫本】

大将殿かくておはするときゝて、あひなうわかきむすめたちは、舟のうちさへはづかしう心げさうせらる。

（123785-3795）

麦生本系統において若い娘たちを描写する際に、「すいたる」という表現が削除されている。浮ついた女性にときめかれても、源氏の品位を損なうだけで、その魅力を表す助けにはならないため、削除したか。

但し、削除にあたる箇所が少ないとはいえ、増補と置き換えの方法から、麦生本と阿里莫本の須磨巻の本文が麦生本系統の特色を有することは確かに認められる。

また、削除に関しても、以下のように考えることが可能である。即ち、削減が時には本文の刈り込みという意図から生じるものである。このことを考慮に入れると、書写者は須磨巻に相当力を入れたとも考えられる。

実際、須磨巻における麦生本系統の異文の数を計算したところ、約 65 箇所数えられる。『別本集成』を肉眼で確認したため、看過した箇所が存在する恐れもあるが、決して低い数字とは言えない。

「わが御かたの人々もまどろまれざりける」（120830-0835）のように、一文字のみだが、ただの否定ではなく、可能助動詞をも使用することによって、源氏のことで悲しむ人々がなかなか寝付くことができない様子を表す例もあるため、長短問わず、麦生本独自の表現として認められる箇所は一律計算に入れたことは断っておく。

以上から、「も」あり語形の大量使用のみならず、麦生本系統特有の異文も少なからず認められることから、校異用の本文を採択する際に、須磨巻を別本的特色を持つものとして認めない理由は、今のところ思いつかない。

臺灣大學學術期刊資料庫

更に、異文を多く有するにもかかわらず、「も」あり語形の数が少ないことから別本から排除された疑いのある夕顔巻、別本として採用されているがそこまで異文が多くない玉鬘巻の状況と合わせて考えると、『大成』による麦生本系統の採択基準には疑問を抱かざるを得ない。

但し、別本として採用しうるとはいえ、須磨巻におけるこのような文意や解釈に関わる異文の分布状況を確認すると、やや気になる傾向が見られる。

（二）各場面における異文の分布状況

以下は「おもほす」と「おもほゆ」の分布状況を考察した際に採用した方法と同じく、新編全集の区切り方に従い、場面ごとの異文の分布状況を確認した。下の表は左から順に、場面の順番、新編全集における当該場面の占める頁数および当該場面に見られる異文数を示す。

場面順	新編頁数	異文数	場面順	新編頁数	異文数
1	3	1	12	2.5	0
2	**6**	**9**	13	3	2
3	**4**	**7**	14	2	2
4	2	2	15	5	3
5	2	2	16	2	3
6	**1**	**4**	17	1.5	0
7	**4**	**9**	18	2	1
8	2.5	2	19	**2**	**3**
9	2.5	1	20	4.5	4
10	2.5	1※	21	**2.5**	**9**
11	1.5	0			

頁を跨る場合、もしくは一頁未満の場合は、行数で計算したため、

臺灣大學學術期刊資料庫

多少のずれがあることを断っておく。また、場面 10 に関しては、阿里莫本には他本と異なる語句が見られる箇所が二つあるが、「みぎはまさりてなん思ひやられ見るめもなくてしほたるゝあまの衣のよるのにしきを」（122522-23）という麦生本にない独自の箇所は、恐らく傍注が混入したものと考えられるため、意図的改変による異文として計算せず、当該場面の用例数を 1 例とした。

このように計算した上で、一頁あたりの異文数が 1 より多く、加筆が比較的に頻繁に行われる場面を太い罫線で示し、その中の数字を太字で示した。

その結果、源氏が左大臣邸の人々に別れを告げる場面 2、源氏が二条院で紫の上と別れを惜しむ場面 3、源氏が忍んで朧月夜と歌を読み交わす場面 6、藤壺に別れの挨拶をし、桐壷院の墓参りをする場面 7、明石入道が娘に源氏と結ばせることを考える場面 19、および源氏が祓いを行う途中に突如暴風雨に襲われ、奇形な生き物が登場する夢に慄く場面 21 には、文章の改変が行われる箇所が比較的多く確認できる。

一方、或いは見逃した箇所もあるが、源氏の手紙を見た紫の上が悲嘆に暮れる場面 11、藤壺、朧月夜および紫の上が源氏に返信する場面 12、および人々が源氏を同情するが、弘徽殿を憚る状況を描くのみならず、二条院に取り残された紫の上が次第に人々に認められ、愛されるようになった様子をも描いた場面 17 は、他の場面と比べると異文が特に少ない。このような場面は点線で囲むことにした。

何故このような分布のばらつきが生じるのか。

まず、場面の番号を確認すると、太い罫線の場面は巻の前半と末尾に、点線の場面は中盤あたりに集中していることが分かる。また、「おもほす」・「おもほゆ」の使用状況に関しても、場面 12 に 2 例、場面 13 に 1 例と、中盤あたりに「も」なしの語形比較的に頻繁に現れる現象が指摘できる。

この二つの結果を合わせて考えると、中盤あたりで校訂者が倦怠感を覚え始めた可能性があると考えられる。語形を置き換える機械

臺灣大學學術期刊資料庫

的作業に関してはまだそれほどあらわに出ないが、文意に関わる、工夫が必要な箇所の場合、縷々と人々の哀愁を述べるのみで、起伏に欠ける場面に関しては匙加減を調整しはじめたと考えられる。

ただ、偏りこそあれ、須磨巻は総じて異文が少なからず見られる巻であることはやはり言える。

（三）異文の性質と麦生本系統の生成背景

最後に、単なる文意の明瞭化による改変と一括りにできない箇所を見て、麦生本系統の生成背景を明らかにする一助になりたい。

須磨へ下向した源氏を未だに忘れられずにいる朧月夜に、朱雀帝が哀訴する場面である。

◆資料⑧

【大島本】・【尾州家河内本】

「ちかきほどのわかれにおもひおとされんこそねたかるべ・・・けれ。いける世にとはげむべによからぬ人のいひをきけむ」と…

（四二一 05-07）・（二五二 16-17）

【麦生本】・【阿里莫本】

「ちかきほどのわかれに思をとされんこそねたけれ。いける世のとは、むべよからぬ人のいひをきけん」と…。

（123297-3307）

朱雀帝は、さほど長生きできないだろう自分との死別よりも、源氏との別れのほうがつらく感じられるだろう朧月夜の薄情を怨み、「いける世」という歌の一節を引く。大島本と尾州家本において、「いける世」の後に付ける助詞として「に」が使われている。『大成』の諸本校異を確認しても、特に異同が認められない。それに対し、麦生本系統には「の」とある。

何故このような違いが生じるのか。当該箇所の引き歌として指摘

臺灣人學學術期刊資料庫

されている『拾遺集』の大伴百世の歌を確認したところ、「恋ひ死なむ後は何せむ生ける日のためこそ人の見まくほしけれ」とある。麦生本系統は恐らく当該箇所の引き歌の本文を確認した上で、原典に忠実であろうとしたことから、このような改変を施したと考えられる。

同系統の夕顔巻にも、「やまびこ」を「あまびこ」という専ら和歌や連歌に使用される語彙に書き換える現象が確認できる[17]。この「いける世」の助詞の違いと合わせて考えると、麦生本系統は、やはり歌に関わる表現を重視する傾向があると考えられる。たとえ一文字の異同でも、軽率に看過すべきではない所以はここにある。

四、おわりに

小論では、須磨巻における麦生本系統の異文の実態について考察した。その結果、以下の三点が言える。

まず、「おもほす」・「おもほゆ」の高い使用率とばらつきのなさ、および須磨巻の異文数から、麦生本系統の校訂者は本巻には比較的に力を注いでおり、他巻と比べても別本の特徴を何ら遜色なく有している。但し、「おもほす」・「おもほゆ」および異文の分布状況から、中盤あたりで倦怠を覚え、やや場面によって意欲が下がる傾向があるという麦生本系統に見られる問題[18]を完全に免れることはできない。

また、前後の表現との一致化を目的とした改変の例について説明した際に、格子もまださながらという表現の近似性から、麦生本系統は、諸本の中でも特に河内本系、もしくは河内本系と近しい写本とは高い親近性を有し、本文を作成する際に、それにおける表現を参考にしている可能性があることを指摘した。

更に、「いける世」という引き歌と一緒に使用される助詞に対する拘りの姿勢を、他巻に対する考察によって得られた現象と合わせる

[17] 注 4 論文 pp79-80
[18] 注 8 論文 pp82-85

臺灣大學學術期刊資料庫

と、麦生本系統には和歌関係の表現を重んじる傾向があり、当該系統が作成された背景には、和歌作成の助けになる意図が存在していると考えられる。

麦生本系統は巻によって、異文数とその分布状況が異なるが、各巻の考察で明らかになった点を少しずつ合わせていけば、同系統の生成背景を明らかにすることにつながると考えられる。

【付記】本稿は科技部専題研究計画「《源氏物語》麥生本系統之文本−以花散里巻至關屋巻為考察對象−」（MOST　109-2410-H-002 -117 -）による研究成果の一部である。

【参考文献】

阿部秋夫他（1995）『新編日本古典文学全集 21 源氏物語 2』東京都、小学館

秋山虔・池田利夫（1977）『尾州家河内本源氏物語　第一巻』東京都、武蔵野書院

伊井春樹（1999）『CD-ROM 版　角川古典大観「源氏物語」』角川書店

池田亀鑑（1979）『源氏物語大成　巻一　校異篇』七版、東京都、中央公論社

石田穣二・茅場康雄（1989）『古典文庫第五〇八冊　源氏物語〔訂正版〕』古典文庫

岡嶌偉久子（2010）『源氏物語写本の書誌学的研究』初版　東京都、おうふう

源氏物語別本集成刊行会（1990）『源氏物語別本集成　第三巻』初版、おうふう

林欣慧（2018）「『源氏物語』の異文―麦生本、中京大本および阿里莫本系統を中心に―」『台大日本語文研究』第 35 期、pp57-85、国立台湾大学出版委員会

臺灣大學學術期刊資料庫

林欣慧（2019）「『源氏物語』玉鬘巻の本文様態―麦生本系統を中心に―」『台湾日本語文学報』第 46 期、pp82-85、台湾日本語文学会

臺灣大學學術期刊資料庫